東南アジア研究　21巻1号　1983年6月

東南アジアにおける人口と伝統的基礎社会の性格
——島嶼部を中心として——

坪　内　良　博*

The Population and Character of Traditional Communities in Insular Southeast Asia

Yoshihiro TSUBOUCHI*

This article discusses the character of population distribution and its relation to the structure of societies and states in Insular Southeast Asia in the early and mid nineteenth century. Except in Java and Bali, populations were characterized by sparsity, diversity, smallness, and mutual independence. Despite the effects of crisis mortality, the long-term population growth in the traditional period seems not to have been much different from those in India and China, which suggests the smallness of the original or early populations. New communities were formed through detachment of derivative settlements in the frontier regions. These characteristics were maintained through to the early and mid nineteenth century, when numerous petty states were found in this region.

The order seems to have collapsed from the late nineteenth century under the unifying forces of colonialism and a rapid population increase, although the principles of social existence under the above population characteristics were maintained to the limit.

I　はじめに

本論は，東南アジアにおける人口現象と社会構成の特質との関係を論ずることを目的とする。ここで対象とする地域は，主としてスマトラ，マレー半島，ボルネオなどを含む島嶼部の世界である。それはきわめて大づかみに捉えると熱帯降雨林の地域であり，人々は牧畜社会に比較するとはるかに定着的ではあるが，しばしば焼畑などの移動農耕を含む，必ずしも確立された灌漑水利農耕には至らない農業に従事してきた。この地域に見出される特徴のいくつかは，時間的なずれを考慮すれば，ジャワ島やバリ島にも存在し，また大陸部東南アジアにも見出されたのであるが，気候的，土壌的，あるいは地形上の有利性の故に，本論で着目する特徴のいくつかはかなりはやい時期に消失している。この意味で時代的限定が必要であるが，ここでは特に19世紀前葉ないし中葉を念頭におくことにしたい。これはヨーロッパ勢力が東南アジアにおいて特に顕著な影響を示しはじめたころにあたり，また中国・インドの巨大人口がその一部を東南アジア地域にむけてさかんに放出しはじめた時期でもある。この時代は歴史的には激動期にあたるわけであるが，筆者が注目しようとしているのは，変動そのもの，すなわ

* 京都大学東南アジア研究センター；The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

ち歴史過程ではなく，その背後に存在し続けてきた自然と人口とのかかわりの様相である。19世紀およびそれ以前を静態的状況として捉えるのはもちろん間違いであろう。それは社会学者や人類学者がしばしば行なった，二分法的な社会分類法，あるいは社会の構造的把握の硬直性に関連している。これに対しては，伝統的構造が，後述するような意味で，そのクライマックスをこの時期に迎えたと理解することによって，この種の二分法をよりダイナミックに活用できるかもしれない。

当時の東南アジア社会の論述にあたってここで利用するのは，特に同時代の英人による記録である。彼らの記述は量的な把握を含むことが多いので利用価値が大きいが，同時に彼ら固有の，あるいはヨーロッパ人としてのバイアスも含んでいる。これらの利用にあたっては再解釈が不可欠であるが，再解釈自体の妥当性は，われわれが彼らよりも，比較・位置づけのための視点や材料をより豊富にもつということによって支えられている。

II　東南アジアの歴史人口生態空間

1.　人口の希薄性

ジャワ島（含マドゥラ島）の人口密度は575人/km²（1971年），バリ島のそれは381人/km²（1971年）で，日本の281人/km²（1970年）をはるかに上回る。大陸部で比較的人口密度が高い北ベトナム（当時の国境区分による）では，この時期の人口密度は136人/km²である。これらに対して，スマトラの人口密度は44人/km²，カリマンタンは10人/km²であって，著しく低い。現在の人口数に達するために，東南アジアではこの100ないし150年の間に著しい人口増加が生じている。1800年時点における東南アジアの人口は，ビルマとベトナムを除けば，1975年現在人口の10分の1以下であった［McEvedy & Jones 1979: 190-203］。ジャワ島やバリ島のような現在の人口稠密地域の人口増加は，もちろんきわめて著しかったが，スマトラ，マレー半島，カリマンタンなどにおいても相当の人口増加が生じており，これらを考慮に入れると，過去の東南アジアには人口的空白状態に近い地域が存在していたといっても過言ではない。

Logan によると，1849年におけるスマトラの全人口は2,487,310人で，人口密度5.3人/km² を算するに過ぎない。彼の数値では，このうち385,000人が3,000平方マイル（7,770km²）のミナンカバウ地域に住むとされる［Logan 1849: 361］。ミナンカバウ地域の人口密度は目立って高く50人/km² に達し，これを除いた地域の人口密度は4.5人/km²となる。Newbold によると，1839年のマレー半島（現在タイ領の一部を含み，シンガポール島およびペナン島を除く）では45,000平方マイルの地域に374,266人が居住するとされるが［Newbold 1839: Vol. 1, 418-419］，これは人口密度3.2人/km² に相当する。ボルネオにおける当時の人口密度は，その人口量の把握が困難なため不明であるが，さらに低いものであったと推定され，またマカッサル付近の人口集中を除けば，セレベス島の人口分布も相当希薄であったとみられる。

当時の人口推定が過小であったか過大であったかは，議論の分かれるところである。例えばジャワの人口に関しては，各調査年次ごとの人口増加の著しさの故に，基本的には調査もれが存在したという見方が強い（Cf. Widjojo［1970］, Peper［1970］）。スマトラに関しては，Logan は Fransis の示した1837年のスマトラ人口4,500,000を過大とみて，前記の数値を示した［Logan 1849: 360］。1795年におけるビルマ王国に関する Symes の人口推定が過大であるとして，のちに Yule の攻撃をうけたことは知られている（Cf.

Symes [1800], Yule [1858])。真の人口量についてはより十分な検討が行われねばならないし，また仮によく検討されたとしても，しょせん確定的な数値は提出し得ないことを認めつつも，本論が扱う地域においては往時の人口密度が著しく低かったことだけは確言することができる。

2.　多様性と小規模性

東南アジア大陸部に関しては，その人口の少なさの異常性を Zelinsky が指摘している。彼は人口希薄性の原因として，インドシナ半島の立地の通路的性格および核心地域の狭小性に由来する政治的・軍事的不安定性が，農業集落および農業生産の不安定性をもたらしたことと，農業生産技術そのものの非効率性を挙げている [Zelinsky 1950]。しかしながら，この地域には，小規模とはいいながらも，本論で扱うスマトラ，マレー半島，ボルネオなどに比べるとはるかに大きな政治勢力が成立していたのである。島嶼部の弱小勢力と接触してきた英人たちによって，大陸部の国々がしばしば帝国 (empire) とよばれるだけの強大さを有したことは，これらが紅河，チャオプラヤー河，イラワジ河などの大河を利用し得たことに関係しているように思われる。これに対して，小河川流域に成立した島嶼部の人口単位は，おのずからその規模を限定されていた。もっともこのような規模の相違は相対的なものであり，東南アジア全体として各人口単位の小規模性が特徴として挙げられることは差し支えないであろう。

このような小規模性は，言語グループの観点からも把握できる。東南アジアの人口は1800年の時点で3,000万人程度であったと推定されているが [McEvedy & Jones 1979: 190-203]，この比較的小さい人口量が少なくとも150以上の言語グループに分かれていたのである。言語グループは細分類によって簡単に倍増するが，言語グループ，またはしばしばそれと近似の境界線を有する文化共有体である種族 (ethnic group) が，そのままの大きさで一つの社会単位とはならず，同一言語グループないし同一種族に属する人口が，社会学的・政治学的観点からはさらに細分されていたという事実が存在する。例えばサラワクに居住するイバン族 (Iban, Sea Dayak) においては，同一種族の間でも首狩りを行なったといわれる。彼らの間には互いに首狩りをしない関係にある特定の社会圏があり，人類学者はこれを部族 (tribe) と考えることもある。インドネシアのランポン州および南スマトラ州に居住するアブン族は，バリサン山脈中の山間盆地に発祥の地をもつとされるが，15世紀以降に諸川沿いに低地にむかって分出していった集団同士は，決してそのまま仲間ではなく，互いに土地の争奪や戦争を行なったという口碑が方々に残されている。「言語」は言語学者によって分類される客観的な構成物である。東南アジアの住民にとって，「言語」と「方言」とは少なくとも主観的には等価なものであり得る。それはアイデンティティを托すべき「ことば」なのであって，「言語」ではない。かくして客観的にはマレー語の一方言を話している南スマトラ州の一村落で，村人は他と異なった「そこのことば」を話すと主張するのである。この意味で多様性は客観的事実のうちにのみ存するのではなく，さらに細分化されて主観的意識の中に定着しているのである。

3.　相対的独立性

前述のような多様性と小規模性の中で，単一コミュニティあるいは複数のコミュニティからなる小規模な人口圏は，ほとんど完結した一つの政治単位を形成し，その圏域内で通婚を行い，生産と消費の主要部分を遂行していた。現実には，タイトルの授与や貢納を通

して，より強力な政治勢力とのつながりが存在していたかもしれない。これを封建制と同義に解したり，単純な支配・被支配関係におきかえることは危険であって，物質的な支配よりも，威信体系の分配をともなうゆるやかなコミュニケーションのネットワークとして捉える方が賢明かもしれない。彼らの間には独立意識が旺盛であり，侵犯に対する防衛の構えを常に保っていたと考えてもよい。われわれの議論にとっては，独立した人口単位の規模が小さいということが重要な点である。

4. 若干の事例

上述の状況に関して具体的なイメージを得るために，これらの地域にみられた小国家群の存在状況について記述しよう。インドネシア・マレーシア地域で用いられるラジャ(raja)という首長に対するタイトルは，日本語では「王」と訳されることが多いが，少し前はしばしば「酋長」の語が適用された。英人による，より以前の使用法をみると，植民地化以前には king と等置されたものが，土着勢力の劣弱化にともない，prince あるいは chief の使用にかわっていく過程を，往時のジャーナルなどに見出すことができる。

小国家(petty states)というよび方は，例えば1823年にペナンの英東インド会社からスマトラ東海岸へ政治・通商使節として派遣された，Anderson に対する指令書の中に見出される。それによると，ダイヤモンド岬からシアク河に至るスマトラ東海岸には，Lankat, Bulu China, Delly, Sherdang, Battoo Barra, Assahan など（原綴のまま）の小国家が分立し，これらすべては多少なりともシアクまたはミナンカバウの支配下におかれていると理解されている [Anderson 1826: 409]。この地域の住民は合計35万人程度と推定されている [*ibid.*: 210]。これらの海岸線の奥地には数多くのバタック族の独立国があるとされ，これらの多くは方言や慣習を異にするという。主な食人国(canibal states)の名は，Seantar, Silow, Tannah Jawa, Sependan, Purba, Semalongan, Selukong, Leabat, Krian Usang, Semapang, Pendolok, Ria Mahriat Ria, Pagar Tangah, Naga Saribu, Nagore, Linga, Perdumbanan, Sepukkah, Dorma Rajah, Bundar, Mirbow, Dolok, Munto Panei, Selumpinang（原綴のまま）である [*ibid.*: 225-226]。

小国家の典型としてしばしば言及されるのは，マレー半島のヌグリ・スンビラン(Negeri Sembilan)に含まれる村落国家群である。Newbold の1839年の書物におけるそれぞれの推定人口は，Rumbowe 9,000, Srimenanti 8,000, Sungie-ujong 3,600, Johole 3,080, Jampole 2,000, Jellabu 2,000 である（地名は原綴のまま）[Newbold 1839: Vol. 1, 419]。ナニン(Naning)は上述のミナンカバウ系小国家と同様の起源を有する国であったが，マラッカに近接していたためもあって早期に英領化された。1834年の Begbie の記述によると，その人口は約6,000であり，最小2戸，最大216戸からなる30余の集落に分かれていたという [Begbie 1834: 149]。

マレー半島海岸部においてはより大型の国が成立していたが，それらの人口は，ケダーおよびリゴール50,000，クランタン50,000，パハン40,000，ペラク35,000，トレンガヌ30,000，ジョホール25,000，スランゴールおよびカラン12,000，パタニ10,000などと推定されており [Newbold 1839: Vol. 1, 418-419]，いずれもスマトラ東海岸の小国家と基本的に類似した人口規模を有する。

同様の小国家的状況は，ボルネオおよびセレベスにもみられた。例えばブルネイに関しては，1809年に3,000家族15,000人と書かれている [Logan 1848: 523]。1848年における Low のボルネオ（ブルネイ）の町の土着

人口に関する推定は，12,000以下となっている。この時期には中国系住民はほとんどいなくなっていたとされる［Low　1848: 106］。ボルネオのその他の国々に関してはMoorにその記述がみられ，いずれも人口記述は不完全であるが，それぞれの人口群が小さいことは明瞭に知られる（Cf. Moor［1837］）。1850年ごろのセレベス人口は1,104,000人と書かれているが［Anonym　1850: 665］，これがマカッサル，ソッペン，ワジョ，ボネ，テルナテなどを含む数多くの小王国に分かれていたことは周知のごとくである。実際の政治的独立単位はより小さく，例えばボネは八つの小国（petty states）の連合体であり，この連合体の首長の決定権はきわめて限定されていたという［Crawfurd　1820: Vol. 3, 11-12］。

小国家が顕著な独立性を保っていたということは，往時の英人たちの小国家（petty states）という用語法自体や，これらの小国家の首長のタイトルの英訳にkingという語をあて，しばしばmajestyという敬称を用いたことなどによってもうかがわれる。独立性は小国家単位というよりは，さらにより下位の村落自体に及ぶことがある。例えばZollingerはランポンの村落（kampong）に関して早期から続いた独立性を指摘しており［Zollinger 1851: 71］，Presgraveは1817年の観察にもとづいて，スマトラのパスマ地方のAna Panjallang, Sumbei Besar, Sumbei Ulu Lura（原綴のまま）などの首長（pasirah）の独立性について述べている［Presgrave　1858: 8-9］。Barnesによれば，スマトラのプンカラン・ジャンビ（Pengkalan Jambi）はジャンビのサルタンに名目的に従属しつつも貢納は行わない。この地域では武器をとって防禦すべき財物を有する者は，自らを独立の首長と考えるのであって，彼の主な財源は周辺丘陵部の採金によって得られるという［Barnes 1858: 345］。同様の独立性は，マレー半島のトレンガヌの属領とされるクママンについても該当する。Crawfurdはフンボルトの早期社会における都市即国家という見方をふまえつつ，早期の東インドの社会を論じて，村落は国家の同義語であったと述べている［Crawfurd 1820: Vol. 3, 6］。

独立性と同時に注意する必要があるのは，統一国家の興亡の目ざましさである［*ibid.*: Vol. 2, 296］。統一国家のみならず，小国家自体もたえざる興亡を経験してきたようにみえる。ブルークによるサラワクの統一，ボルネオにおける比較的新しいサルタン治下の小国家ポンティ・アナック（Ponti Anak）の成立なども，こうした背景の下に行われたと解されよう。

Ⅲ　東南アジアの人口増殖パターン

1.　開拓前線と派生村形成

前述のような性格をもつ人口クラスターが，どのような増殖パターンを有し，どのように維持されてきたかは実際にはほとんど分かっていないのであるが，以下，これにかかわる仮説の若干を述べよう。

東南アジア地域の人口希薄性についてはすでに述べたが，それは当初人口の希薄性ないし絶対数の少なさに起因するところが大きい。大ざっぱな推計によれば，紀元1000年における東南アジアの総人口は，その総面積408万km²に対して910万人程度であり，同時期のインド亜大陸は総面積450万km²に対して7,900万人，中国本土は400万km²に対して6,000万人の人口を擁していたと考えられている［McEvedy & Jones 1979: 166-203］。

東南アジアの人口はこのような希薄性にもかかわらず，全体としてみれば常に増加を続けてきたのであって，我が国の江戸時代のような停滞を経験することはなかった。人口増

加率の僅差が長年月の間に大きな人口差となってあらわれることは，人口学者と歴史学者の対話のための基礎的コミュニケーション事項の一つとして注意されており，例えばDurand は，当初人口100が年率0.5%で増加した場合，1,000年後に14,800人になるのに対して，それよりわずか0.1%高い0.6%の増加を続けた場合には39,820人に達することを重視している [Durand 1972]。この観点から検討すると，紀元1000年から1850年に至る850年間の東南アジアにおける年平均増加率0.18%は，インド亜大陸の0.13%を上回るものの，中国本土の0.23%には及ばず，このことは増加率自体の議論よりも，紀元1000年までに達成された人口量の影響が重大であることを示唆している。「当初」が実際にいつごろを指すべきかということに関しては慎重な検討が必要であり，ここでは少なくとも紀元1000年当時から東南アジア地域の人口が相対的に小さかったことを強調しておきたい。

しかしながら，一様な人口増加の仮定は人口統計学者の悪癖である。細分された人口クラスターの増加率間の差異，および各クラスターごとに観察される時代的・年次的変動は，人口と社会をつなぐ論理において軽視してはならない。

ここで，東南アジアの小人口状況における人口増殖とコミュニティ形成に関する，一つの仮説的な見方を提示しておきたい。人口の流れは比較的余裕のある土地の存在を前提にフロンティアへとむかうが，伝統的な開村ないし開拓は，血縁・地縁関係あるいは主従・親分子分関係を基軸とする結合を基礎として行われた。すなわち，これらの社会関係を栄養生殖的な分裂によってそのまま移動させた形で，派生村ないし分村形成が行われたのである。派生村形成は，(1)まず最初に，ときには100 km を超える遠距離からの冒険的移住者によって最初の集落が形成され，この集落が元村からの後続者を加えて膨張する，(2)定住が成功して人口の自然増加が著しくなると，最初の派生村から比較的近い位置に二次的派生村が形成される，という過程で行われることが多い。分離したコミュニティと親村との関係は，近接する場合には密接に保たれることもあるが，遠距離の場合には次第に疎遠となり，その本末関係さえ忘れ去られてしまうことがある。

筆者が1978年にインドネシアの南スマトラ州において集落形成史の調査を行なった際にも，上述のような村落形成史のパターンが各所に見出された。その一例を以下に示す。マルガ・ブンクラ (Marga Bengkulah) はパレンバンから約100 km 南方に，コムリン川の分流アイル・ブンクラ (Air Bengkulah) に沿って展開するコムリン族の集落から成り立っている。村人によれば，この土地は270年ほど前に，スマトラ脊梁山脈南部の山間盆地スカラブラック (Sekala Berak, 直線距離で約190 km 離れている) を起源とする祖先によって開かれた。これらの祖先はドゥマックからの来住者の影響で，すでにイスラームに帰依していた。彼らは五つの筏に分乗してコムリン川を下ってブンクラ川に入り，そこにヌグリラトゥ (Negeri Ratu, 現在の Pulau Gemantung)，タンジョンマス (Tanjung Mas, 現在の Tanjung Baru)，コタブディ (Kota Budi, 現在の Kota Bumi)，タンジョンラガ (Tanjung Laga)，およびウラックルバル (Ulak Lebar, 現在の Ulak Balam) の五つの集落をつくった。これらの集落はのちに10個の分村を形成して，現在ではマルガ (marga, 行政村に相当) 内に15のドゥスン (dusun, 行政上の地位を認められた集落) がある [坪内 1979: 491-492]。

東南アジア各地で伝統的に行われてきたこの種の集落形成とは対照的に，デルタあるい

は低湿地における水路構築を契機として，ときには強制移住をともなって，短期間のうちに大量の入植者を迎えた場合がある。後者のような大規模な新開拓地域には出身地を異にする人々が混住し，そこでは最小地縁親族居住単位である数家族から形成される地域血縁集団を除けば，寺，モスク，学校などがわずかに居住者の社会関係を活性化させているような，境界の不鮮明な，組織性の希薄な水路沿いのリボン状集落が展開することになった。

伝統的な派生村形成において，新開拓集落が定住コミュニティとして存続するかどうかは，生業の性質と土地の良さにかかわっている。人口比からいえば土地は無限に近く存在していたのであるが，限定された技術水準および生活環境（熱帯的不健康，特にマラリアその他の風土病との関係）からすれば，適地は限定されていたと考えるべきであり，不適地に成立したコミュニティはときにはそのまま消滅へとむかうこともあり得た。

十分に立証された説ではないが，上述の増殖過程との関連において，大陸部の少数民族間の比較にもとづいて，小規模集落における人口増殖傾向の顕著さと，大規模集落におけるその相対的な弱さを論じた Kunstadter の仮説は，その適用方法によっては有用な局面を見出すことができるかもしれない [Kunstadter 1972]。

2. 戦争およびクライシス・モルタリティ

人口増加の議論にとって，土地・技術と並んで重要なのは，戦争およびクライシス・モルタリティ（crisis mortality）の役割である。東南アジアを対象とする限りでは，これらについてはまとまった研究はない。東南アジアにおける前述のような小コミュニティの独立的な存在は，たえざる小戦争の発生を必然的にする。スマトラのバタック族は，特にその好戦的な性質で往時のヨーロッパ人の間で有名であった。戦争には一定のルールがあって，戦闘自体が儀礼化していることもある。しかし，他の場合には戦争は真の殺戮の場であり，争奪の場である。火器の導入は後者への傾斜をより強めたといえよう。

戦争による犠牲者の数を正確に知ることはほとんど不可能であるが，ここで一つの戦争の例を挙げよう。シャム占領軍に対する1838年のケダー・マレー人の反乱に際しては，7,000ないし10,000人のマレー人が動員されたが，マレー人の戦死者は彼ら自身の数えるところによれば958人であり，実際は2,000人程度であったと推定されている [Low 1850: 372-376]。この時点におけるケダー，リゴール，パタニおよびプロビンス・ウェルズレイ (Province Wellesley) の人口は総計11万人程度と考えられるので（Cf. Newbold [1839: Vol. 1, 418-419]），戦死者は人口1,000につき8～18程度となる。

性・年齢的に最も重要な部分の人口が戦争で失われるのであるが，戦争は直接的な戦死者のほかに，しばしば間接的な死亡者を発生させた。また当時においては，軍隊を召集し，非日常的な団体生活を送ること自体が，大量の病気感染死亡を惹起した例があることも，つけ加えておく必要がある。戦争は小人口状況における重要な資源の一つである労働力，すなわち奴隷の調達手段でもあった。ビルマ軍の進攻によって大量のアラカン人がビルマへと移され，シャム軍の侵入によって多くのマレー人がバンコクへ拉致されたことはよく知られている。

戦争は多くの逃亡民を発生させた。1821年11月，シャム軍（リゴール軍）の侵入のために逃亡したケダー住民は，大挙して英人支配下の隣地プロビンス・ウェルズレイおよびペナン島に移住し，1816年のペナン人口37,445人，プロビンス・ウェルズレイ人口4,000人

は，1824年にはペナン37,943人，プロビンス・ウェルズレイ16,479人を数えるに至った[Low 1850: 20, 113]。1831年のシャム軍の侵入の際には，16,000人がプロビンス・ウェルズレイへ移住し，ケダーに残った者は20,000人に過ぎないといわれる。かくして1831年のプロビンス・ウェルズレイ人口26,000人は，1832年には50,000人に達した[*ibid.*: 363-369]。パタニにおいてもシャム軍の侵入は，顕著な人口減少をひきおこしている。Low によればパタニ人口は10万人から1万人に減少したという[Low 1836: 128]。

クライシス・モルタリティに寄与する原因には戦争のほかに，飢饉，伝染病などがある。大洋の島々においては津波や火山爆発が多くの人命を奪うことがあったし，またその間接的影響として飢饉が発生することもあった。伝染病としては，疱瘡，麻疹（はしか），コレラが特に重要であったが，ほかに肺結核，性病などもその人口に対する影響を軽視することができない。死亡全体の中でクライシス・モルタリティの占める位置を知ることは興味深くかつ重要であるが，この種のデータは例えば教会の記録を歴史人口学的手法によって数量化することなどを通して入手可能である。この種の作業は東南アジアではフィリピンなどにおいてのみ可能であるが（Cf. Smith [1978]），地域によっては入手可能な親族系譜の分析は，間接的にではあるがデータ入手の範域を広げるかもしれない。

流行病の記録は断片的であるが，たんねんに集めると，限定された地域に関してわずかながらも情報を得ることができる。ここではその一例を挙げる。1819年10月からペナンでは約6週間にわたってコレラが猛威をふるった。このときの死亡者は少なくとも1,200人と推定され，死亡登録が不完全なため，実際にはもっと多かったのではないかと考えられている[Low 1850: 21]。1816年および1824年におけるペナン人口はすでに示したように，それぞれ37,445人，37,943人であったから，1819年ペナン人口を仮に38,000人とみても，コレラによる死亡者は人口1,000に対して少なくとも32ということになる。これは当時における通常年の1年分の死亡以上に相当する。

相互独立性・孤立性を基本とする状況の下では，他のコミュニティの参与によって飢饉などの危機を救済する機能が作用しないことが指摘されねばならない。この状況は他方では病気の伝染が及びにくい状況を成立させるようにみえるが，実際には，限定された交渉の枠内においても伝染は防禦困難な場合があり，また免疫性の獲得を考慮に入れると孤立したコミュニティほど一たび流入した伝染病に対する抵抗力が弱いという側面をも有している。

Ⅳ　都市の存在形態

上述の人口分布状況を背景にして，伝統的な東南アジア世界では都市がどのような形で存在し得たかは興味ある問題である。一部の例外およびのちに発達してきた状況を除けば，これらの散在したコミュニティを経済的な意味で統括し支配する，国家の中心としての相当な規模を有する都市は，存在することが困難である。村落の小連合体が小王国として存在し得ることについてはすでに述べたが，ここではさらに都市自体もその独立性ないし孤立性を保ちつつ存在する状況を想定することができる。これに関しては若干の説明が必要である。

第1に，若干の例外を除けば，都市は往時のコミュニケーション・チャネルとしての川の河口部あるいは河流域の要所の戦略的な位置に存在したと考えられる。基本的には小河

流域ごとに都市が存在したと考えてもよい。これらの都市と河流域に成立している村落連合国家は，川をチャネルとして細々とした財の流れによって結ばれていた。

第2の想定は，都市は小さく，かつ自給的でさえあり得たということである。西暦1800年という時点において，東南アジア地域で人口10万を超える都市は，上ビルマのアマラプラ（Amarapura，175,000）とジャワのスラカルタ（Surakarta，105,000）を数えるのみであった（これらのほかに，アラカン，パガン，ペグー，アユタヤ，アンコールなどは1800年以前に10万以上の人口を擁していた時代がある）。人口3万人を超える都市は，上記の2都市に加えて，バタビア（92,000），ジョクジャカルタ（90,000），マニラ（77,000），フエ（不詳），ハノイ（62,000），サイゴン（不詳），バンコク（40,000），アチェ（40,000），ラングーン（30,000），プロム（30,000），ブルネイ（30,000）などに過ぎない（Cf. Chandler & Fox [1974]）。以上のうち，マニラ，アチェ，ブルネイを除けば，他のすべてが大陸部あるいはジャワ島に位置しており，ジャワ島以外の島嶼部は都市密度がきわめて低かったことに注意する必要がある。この程度の人口は，広領域の経済支配とかかわりなく維持できる可能性がある。

第3の重要な想定は，都市は経済的な中心としてよりは，宗教的あるいは政治的に中心性ないし権威性を具えていたであろうということである。都市と村落とはシンボルの共有によって結ばれていたという側面を重視する必要がある。これを一種の結合体とみる場合，それはすでに述べたように，支配・被支配の物質的経済的関係としてよりは，タイトル付与あるいは名目的な貢納によって表象される権威服従関係のネットワークとして捉えた方がよいかもしれない。

主として大陸部に見出される比較的大規模な都市の成立は，おそらく軍船を駆使した大河流域沿いの集落群の統一に関係するものであろう。この場合でも経済的な支配関係は強調され過ぎてはならない。これらの首都の数はきわめて限られており，また興亡の歴史に富むものであった。

V　クライマックスの達成と状況転換
——現代への連続と不連続——

最初に述べた東南アジアの政治＝人口状況の特質，すなわち人口の希薄性，多様性，小規模性，および相互独立性が，人口増加の状況の下で，観念として限界に至るまで維持されると考えてみよう。この限界点は破局点（catastrophe）であるが，理念あるいは行動原理としての希薄性，多様性，小規模性，相互独立性は，この破局点に達する直前に最高になるというクライマックスないしアンティクライマックスの考え方が可能である。これは比喩的にいえば，ゴム風船が破裂直前にその全容を示し，シャボン玉がその存在を失う寸前に最も多彩な輝きをみせることに譬えられよう。本質的な特徴の表出，あるいは典型の鋭い認識は，危機状況に達したときに，その現実的不在にかかわらず，最も明瞭に認知できるのである。

クライマックスに近づく状況においては，人口希薄状況における原理を保ちつつ居住不適空間が居住地化されていき，独立性を維持するために紛争・戦争が多発化し，多様性の原理を保ちつつ空間的近接居住をともなう多民族都市が簇生するのである。

多民族都市成立の推進力になったのは，大規模貿易の構造化，さらには植民地化をおし進めようとするヨーロッパ勢力の拡大であったが，その実現力となったのは中国およびインドからの移住者たちであった。彼らの存在が今日の都市においても重要であることはい

うまでもない。このような外来要素の混入に対して，東南アジアの人口構造は許容性を有していたといえる。

外来要素は内陸においては錫採鉱やゴム栽培にもかかわり，海岸部においては港湾都市の実務部分を占めてきた。これらの移民の導入と在来人口の自然増加によって，従来の人間と土地との関係は急激に変化していった。点と線の関係であった川筋のネットワークは面の世界へと移り，平野と都市の関係に移行したのである。都市，錫鉱，ゴム園を支える人口のかなりの部分が，遠距離外来のものであったとしても，平野開拓にかかわった人口のかなりの部分は，東南アジア内部からという意味で少なくとも相対的に土着的なものであった。これらが従来の人口クラスターからいかにひき出されていったかは，研究に値する課題である。これらの大量移住によって形成された新空間は，その微小部分に着目すれば伝統的な派生村形成のパターンを維持して，出身村の親族・近隣による集団形成を保持していたとしても，それらは全体的な高密度の配列状況からみれば，独立性を強調するにはあまりにも微細な単位に過ぎない場合が多く，自己発展を待つには囲繞する空間がすでに不足していた。このような状況が今日の平野部農村の基礎構造となったのである。

英国，オランダ，あるいは土着勢力による広領域支配が成立するのは，従来の土着の小国家群のネットワークがそのクライマックスに達したことと無関係ではない。英国旗あるいはオランダ国旗の下での平和は，対立と戦争が各小国家に課した重荷と実際の損傷をとり除き，人口移動を円滑化し，これらによって人口増加傾向をさらに強めた。他方，伝統的な固有の支配理念が，この過程で実質的な政治的・経済的支配理念へと転換していくのである。かくして，東南アジアの固有空間は少なくとも表面的にはその意味を喪失していくのである。

参考文献

Anderson, John. 1826. *Mission to the East Coast of Sumatra in 1823.* (Reprinted in 1971 by Oxford University Press)

Anonym. 1850. The Geographical Group of Celebes. *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia* 4. (Translated from Temminck's *Coup D'Oeil General sur les Possessions Neerlandaises dans L'Inde Archipelagique, 3.*)

Barnes, Thomas. 1858. Moco-Moco to Pengkalan Jambi, through Korinchi, in 1818. *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia* New Series 2.

Begbie, P. J. 1834. *The Malayan Peninsula.* Vepery Mission Press. (Reprinted in 1967 by Oxford University Press)

Chandler, Tertius; and Fox, Gerald. 1974. *3000 Years of Urban Growth.* New York: Academic Press.

Crawfurd, John. 1820. *History of the Indian Archipelago.* 3 Vols. (Reprinted in 1967 by Frank Cass & Co. Ltd.)

Durand, John D. 1972. The Viewpoint of Historical Demography. In *Population Growth: An Anthropological Implication,* edited by Brian Spooner. The MIT Press.

Kunstadter, Peter. 1972. Demography, Ecology, Social Structure, and Settlement Patterns. In *The Structure of Human Populations,* edited by G. A. Harrison and A. J. Boyce. Oxford University Press.

Logan, J. R. 1848. Traces of the Origin of the Malay Kingdom of Borneo Proper, with Notices of Its Condition When First Discovered by Europeans, and at Later Periods. *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia* 2.

———. 1849. A General Sketch of Sumatra. *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia* 3.

Low, Hugh. 1848. *Sarawak, Its Inhabitants and Productions, Being Notes during a Residence in That Country with His Excellency Mr. Brooke.* (Reprinted in 1968 by Frank Cass & Co. Ltd.)

Low, James. 1836. *The British Settlement of Penang.* (Reprinted in 1972 by Oxford University Press)

———. 1850. An Account of the Origin and Progress of the British Colonies in the Straits

of Malacca. *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia* 4.

McEvedy, Colin ; and Jones, Richard. 1979. *Atlas of World Population History.* Penguin Books.

Moor, J. H. 1837. *Notices of the Indian Archipelago, and Adjacent Countries, Being a Collection of Papers Relating to Borneo, Celebes, Bali, Java, Sumatra, Nias, the Philippine Islands, Sulus, Siam, Cochin China, Malayan Peninsula, etc.* (Reprinted in 1968 by Frank Cass & Co. Ltd.)

Newbold, T. J. 1839. *Political and Statistical Account of the British Settlements in the Straits of Malacca.* 2 Vols. London : John Murray. (Reprinted in 1971 by Oxford University Press)

Peper, Bram. 1970. Population Growth in Java in the 19th Century. *Population Studies* 24 (1).

Presgrave, E. 1858. Journey to Pasummah Lebar and Gunung Dempo, in the Interior of Sumatra. *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia* New Series 2.

Smith, Peter. 1978. Crisis Mortality in the Nineteenth Century Philippines : Data from Parish Records. *Journal of Asian Studies* 38(1).

Symes, Michael. 1800. *An Account of an Embassy to the Kingdom of Ava.* G. & W. Nicoi. (Republished in 1969 by Gregg International Publishers Ltd.)

坪内良博. 1979. 「南スマトラ，コムリン川流域およびムシ川下流部における集落形成史」『東南アジア研究』17(3).

Widjojo, Nitisastro. 1970. *Population Trends in Indonesia.* Ithaca & London : Cornell University Press.

Yule, Henry. 1858. *A Narrative of the Mission Sent by the Governor-general of India to the Court of Ava in 1855.* London : Smith, Elder, and Co. (Reprinted in 1968 by Oxford University Press)

Zelinsky, Wilbur. 1950. The Indochinese Peninsula : A Demographic Anomaly. *The Far Eastern Quarterly* 9(2).

Zollinger, H. 1851. The Lampong Districts and Their Present Condition. *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia* 5.